服従ダイアリー

プロローグ

マナカとの幸せな日常。それはあたりまえの様に続くものだと
思っていた。それがある日を境に悪夢に変わるなんて
これっぽっちも思っていなかった。

簡潔に言うと、僕とマナカとその家族がある人物の言いなりに
なってしまったという事だ…。
いわゆるマインドコントロール状態に陥っていた。
いったいどうすればそんな事ができるのか僕には
知るよしもないが、とにかくそうなっていた。

これは、そんな僕の悪夢の記録＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

そう…それはある日突然始まった。あの日はいつもの様に彼女と一緒に帰宅していた。

『ふふふ、それでね、新しいお菓子を作ってみたの。よかったら家に来ない？』

『もちろん行くよ。マナカのお菓子おいしいもんなぁ～』

『よかったぁ～、今回のはね、ちょぉ～っと自信あるんだぁ。』

僕たちの仲は家族公認になっていて、彼女の家には気軽に行っていた。
彼女の事は本当に愛しているし、一生彼女と一緒にいたいと本気で思っていた。
このときは、それがきっと実現するんだろうと思っていた。

しかしこの時すでに「アイツ」の欲望と悪意は僕たちを侵食していたんだ…

何も知らない僕は彼女の部屋へ行き、出された紅茶を飲んだ。しばらくすると強い眠気が襲ってきて、僕は眠りこんでしまった。そして目覚めとともに始まったんだ…この…醒めない悪夢が

朦朧とする意識…なんとか目を開けると、目の前で信じられない光景が…
パンツ一枚の彼女にしばらく目を奪われた。

「お！やっと目覚めたかぁ、ちょっと薬が多すぎちゃったかな。まあいい、
初めまして〇〇君。いきなりですがこの娘は今日から俺のモノになっちゃいました。」

「う…な、なに言ってるんだ…オッサン…頭いかれてんのじゃないのか？う…ぐ」
怒鳴り散らし、ぶっ飛ばしてやりたかったが、まだ朦朧として言葉を搾り出すだけで精一杯だった
「さ…さっさとマナカから離れろ…け、警察…呼ぶぞ…」

マナカの乳房をもみしだきながらヤツは言う
「ぬふふふ、無駄無駄無駄。キミはもう俺の操り人形みたいなものだ。今の発言だって俺が許可
しているから言えたんだよ。力も入らないでしょ。ん？」

「ふ、ふざけんな…そんなこと…できるわけ……」
う、うそだろ…しゃべれない…

「できるわけ…なに？ん？　ぬふふふ、わかったか。負け犬君。キミがリア充なのは今この瞬間に終了
しました。残念でしたね（笑）これからは歯を食いしばって羨ましがる方へ転向です。」

ヤツはマナカの乳房をもみ続ける。すると彼女は熱い吐息を漏らし始める

『んっ…はぁ…はぁ…んっ、ん…』

おそらくマナカも奴に操られているんだろう。きっとそのはずだ。そうでなければあんな中年の腰に両腕をまわし、黙って胸を揉ませているわけがない！くそ！マナカ！正気に戻ってくれ…。

「さっきから乳首がコリコリになってるよ、こうされるのきもちいい？ん？」

『はぁ・・・ん・・あっ・・・ん・・ん・・・』

マナカはしっとりと汗を掻き始め、パンツにシミができ始めてきた。

「ああそうだ、○○君。彼女には今キミがこの部屋にいる事は認識できていないよ。キミという存在を感知できないようにしてある。だから俺がキミに話しかけている事やキミが俺に話しかけていることも聞こえない。ふふふ、君がいない時は彼女がどんな女なのかわかる貴重な体験だよ、じっくり味わってくれよ。」

『お・・・お前が全部やらせてん・・・だろうが』

「お！俺の制御下でよくしゃべれたね、ちょっと驚いたよ。ふふ、マナカはね、すごく微妙なレベルでマインドコントロールしてるんだよ、俺の命令と自分の意思がせめぎあっている状態だな。正直俺も完全に言いなりな人形じゃおもしろくないのでね。」

『はっ・・あっ、あっ・・はぁ・・あぁ・・んぁ』

「マナカ、そろそろセックスしていいか？」

『え？・・・んぁ・・だ、だめぇ・・・』

「どうして？パンツがこんなにベチョベチョになってるのに」

『ん、んぁ、はぁ　大好きな・・彼氏が　いるの・・は、初めてはその人と・・って決めてるのぉ・・・』

「セックスはダメだけど彼氏がいないところで胸を揉ませるのはいいの？」

『そ、それはぁ・・・』

「もう、オ○ンコが疼いて疼いてしかたないんじゃない？ん？大丈夫、彼にはバレないよ。処女でも血が出ない人や痛がらない人もいるんだから。さぁ、ほら、グチョグチョのパンツは脱いじゃおっか」

しばらくためらっていたが、マナカはゆっくりとパンツを脱ぎ始めた・・・

う…嘘だろ…マナカ…マジでそんなオッサンとやっちまうのか…

「ふふふ、もうオ〇ンコ疼いちゃってどうしようもない感じでしょ？俺のチ〇ポでかき回さないとおさまらないよ。」

『でも…わた…し…やっぱり、んぁ…はぁ、はぁ…こ、こわい…』

「安心していいよ、マナカ。絶対痛くないから。頭おかしくなっちゃうくらい気持ちよくしてあげるよ」

彼女は横たえられ、淫核や膣口を丹念にいじられはじめた。乳房をいじられていたときよりも、強く感じ始め、愛液が尻穴まで垂れるほどだったが…

『んぁ…や、やっぱりダメぇ…だ、だめぇ…』

「そうかぁ～、そんなにイヤじゃしょうがないね、じゃあ、ほら、このローターで自分でしてみる？オナニーなら彼を裏切る事にはならないもんね。」

ヤツはゆっくりとこちらへ来て僕のそばに座った。
「んふふふ、「やはりマナカは僕を裏切らなかったぁ！キミを信じていたよ」って感じかな？
彼女に惚れ直しているところ悪い情報なんだが、今日はマナカと俺は絶対一つになっちゃうよ。
あんなオモチャじゃ疼きが収まるどころかどんどん酷くなる。まあそう暗示をかけたんだが…」
『んっ…ん～っ…はぁ、
んんあ…どうしてぇ…あっ
はっ…はっ…あっ…』
はぁ
ぐぢゅ
マナカはちらちら
とヤツを何度もみている…
今にも求めそうな表情だ…
「どうした、マナカ？やっぱり俺のチ○ポが欲しいんだろう？ん？
ラストチャンスだぞ。あと十秒以内に言わないと今日は帰るよ。
ハイ　じゅ～　きゅ～　は～ち　な～な　ろぉ～く」
『あ…ま、まっ…て』
「ごぉ～　よぉ～ん　さぁ～～～～ん」
『……さい』
「に～～～　い～～～～～～～～ち」
『お、オチ○チンください！オ○ンコにいれてください！』

「ははは、いいのか？初めては彼氏にあげるんじゃないのか？」
『んっ・・・んんっ・・・ゴメンなさい○○さ・・・
わ・・わたし・・もう・・』
ヤツは彼女の髪を撫でながら
優しい声で囁く
『大丈夫。お前が黙っていれば
彼には絶対ばれないよ。
さあ、手をどけてごらん。そう。』
彼女がゆっくりと手をどける。オ○ンコは愛液で
べったりとしてヤツのチ○ポを受け入れたくて
ヒクヒクしている・・・。
ぬぷっ
ぬぷっ
ヴヴヴ

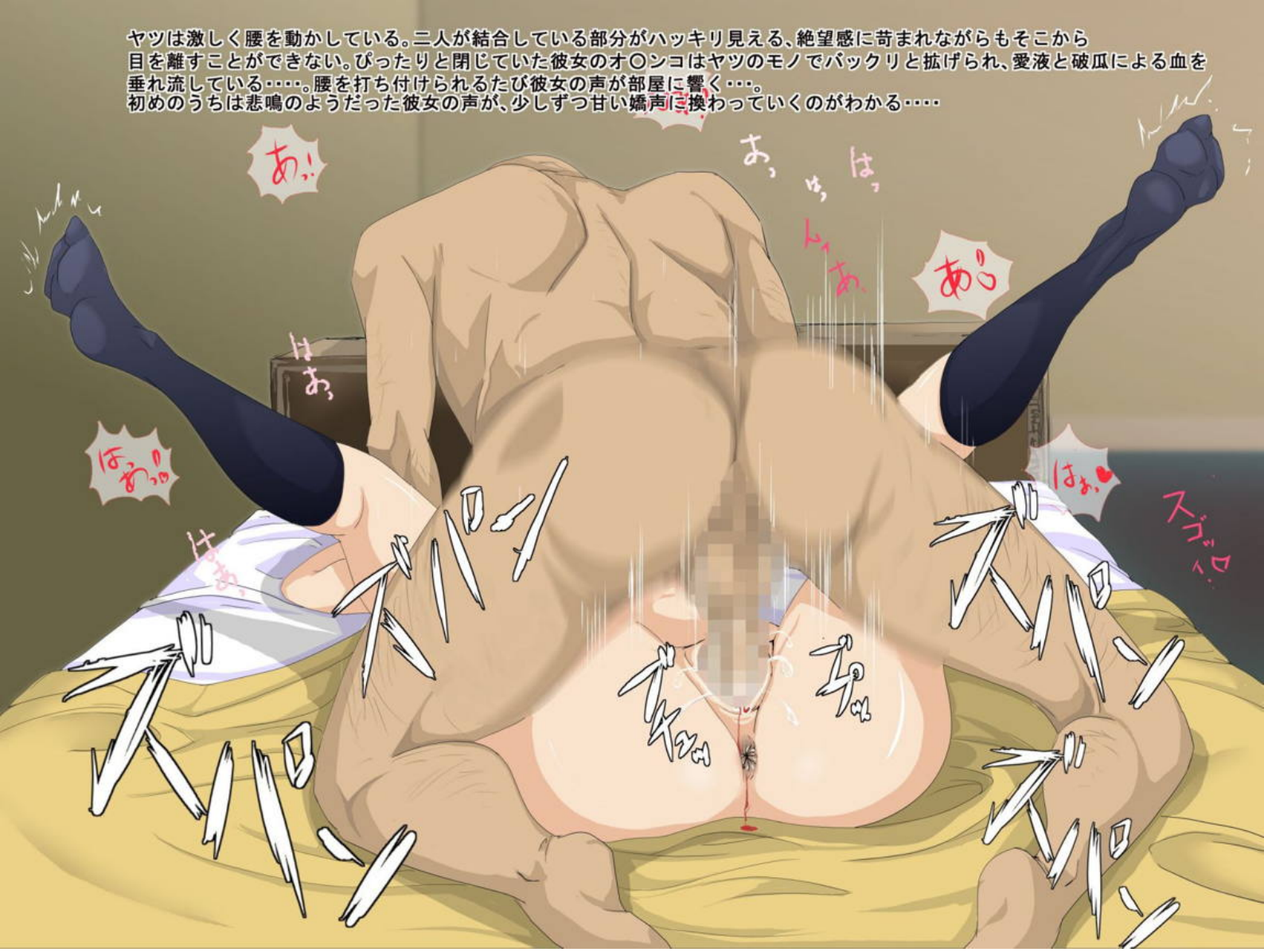
「ほらマナカ…先っぽが少し入ってるよ。ホントにいいだんだな！彼氏のチ〇ポじゃなくて。」
「んぁ○○ぱっ○○○いいからぁ　××さんでいいからぁ！いれて！！」
ハァー
ハァー
ピク…
ピク…
その言葉を聞いてもヤツ執拗にじらす。
「ん～ふふふ、ちゃんとお願いできないコにはあげられないなぁ～」
「○○○あっ○○○ま○○○マナカのぉ○○○
オ〇ンコに××さんの
おチ〇ポください！！！
もうっ！おチ〇ポ突っ込んでぇええ！！！」
ピク…

その言葉を聞いた瞬間、ヤツは容赦なく
一気にマナカを貫いた。彼女は目を見開き
ビクンッ！！ビクビクビク！！と全身が痙攣した。

少しの間のあと・・・

「んあああああああああああ！！」という
絶叫が聞こえた。

ヤツは激しく腰を動かしている。二人が結合している部分がハッキリ見える、絶望感に苛まれながらもそこから
目を離すことができない。ぴったりと閉じていた彼女のオ〇ンコはヤツのモノでバックリと拡げられ、愛液と破瓜による血を
垂れ流している‥‥。腰を打ち付けられるたび彼女の声が部屋に響く‥‥。
初めのうちは悲鳴のようだった彼女の声が、少しずつ甘い嬌声に換わっていくのがわかる‥‥



いちだんと激しい嬌声と共にマナカは絶頂した。ビクンビクンと全身を震わせ、根元まで挿入されたチ〇ポをぎゅっと搾り取るように包み込む。
ヤツはチ〇ポを挿入したままマナカのイキ顔を楽しんでいる。
あ♡
あ！！
ガクッ
んあっ♡
ガクガク
ビクンッ
ビクンッ
ギュッ♡
キュ♡

二人は下半身を結合させたまま、唇も合わせる。

マナカは初めて自分を絶頂させた相手の目をじっと愛しげに見つめながら、
お互いをむさぼるようにキスを続けている・・・

「ふふ、オ○ンコ、イっちゃった？気持ちよかったでしょ？」

「・・・ふごぉひぃ・・・こ、こんらのぉ・・はぁ・・はぁ・・・ひもひぃ・・・」

ゆっくりと腰のストロークを再開させながら聞く
「俺もそろそろイキそうだよ、どこに出して欲しいの？
オ○ンコに出しちゃっていい？」

「！・・・それは・・・らめぇ・・・オ○ンコは・・・ら、らめぇ・・・」

「じゃあ、おなかの上に出すから、残りは
口で吸ってくれる？」

「・・・いいよぉ・・・」

ヤツは射精の寸前にオ○ンコからチ○ポを引き抜きゼリーのような精液を腹の上にぶちまけるとすぐに残りを彼女の口に注入した。マナカはぱっくりとヤツのチ○ポをくわえこみ、尿道に残る精液を吸い取るうとしている。
「あぁ••もういいよ、マナカ。•••ん、どうした•••。そんなにこれが好きになっちゃった？そんなにがっつかなくてもコレはおまえのものだよ。」
ち、
ちゅぱ・・
ん♡
ん♡
ゴクッ
ピクッ…
ピクッ…
モワァー

ヤツはマナカにチ〇ポをしゃぶらせながら思い出したように僕の方へ向き話しかけてきた

「ふぅ～、どうだった？〇〇君？俺とマナカの初交尾は？ん？おいおい泣くほど悔しかったのか･･･
まあ、このコほどの女を目の前で奪われればしかたないか･･･。さすがに罪悪感をおぼえるね･･･。

ふむ･･･俺が処女をもらっちゃったわけだけども、まだマナカの事が好きか？取り戻したいか？」

「あ･･･あたりまえだろっ！ぐぅ･･･てめぇ････いつかぶっ殺してやるっ･････」

「まあまあ、そんな物騒な事言わないでくれ。それよりまだこのコがすきならチャンスをあげよう。
ふふ、マナカにもキミにも今までどうりの日常を送らせてあげるよ、その間にキミとマナカの
マインドコントロールを解いてみるといい。ああ、当然夜はどんどん調教していくよ、でもしばらくは
膣内射精はしないでおいてあげるよ、せっかく取り戻したのに俺の子を孕んでるんじゃキミも
テンション上がらないだろう？ふふふ。俺とのゲームだな。ああ、でも、俺がもうマナカを妊娠させたいと
思ったら、その時点でこのゲームは終了な。そのときはキミにはきっちり伝えるから心配しなくていい。
初膣内射精シーンもキミには見せておきたいからね。」

予めキミにかけてある制限をいくつか教えておこうか。
一つ目は、マナカと俺がセックスしてる事をキミが知っているという事をマナカに伝えられない。
二つ目は、マナカに強引な事はできない。無理に引き止めたり、ましてや無理に抱こうとしても無駄だよお。
三つ目は、誰かに助けを求める事もできない。
あといくつかあるが、簡単に言うと衝動的な行動、俺が窮地に追い込まれるような行動や発言はできないという事だ、
まあそうでなければ野放しにはできないからね。
ふふ、しかし催眠を解く鍵は必ずある、それは本当だ。それは行動か言葉か道具か･･･なんだろねぇ～ふふ。
知恵と「愛」（笑）でなんとか俺から奪い返して見せてくれよ、ははははは。

もたもたやってると催眠がなくても俺から離れられなくなっちゃうぞ、ふふふ。

数日後の放課後――――――――――――――――

僕は奴のマインドコントロールを解くために必死になっていた、このように足掻くのも奴の誘導によるものではないかと一抹の不安を覚えるが、そんな事を考えてもしょうがない。なんとかマナカを取り戻す、と決意したもののいったいどうすればいいのか皆目見当も付かなかった、ただこうやって彼女の帰宅を遅らせる事しかできていなかった。

『どうしたの？むずかしい顔しちゃって。』

『んっ？あ、ごめん、なんでもないいんだ。それよりマナカこそ眠そうだけど、な、なんかあったの？』

『・・・ん～、ちょっと夜更かししちゃったから・・・最近することが多くて。』

『な、なんか悩み？俺でよければ・・・。』

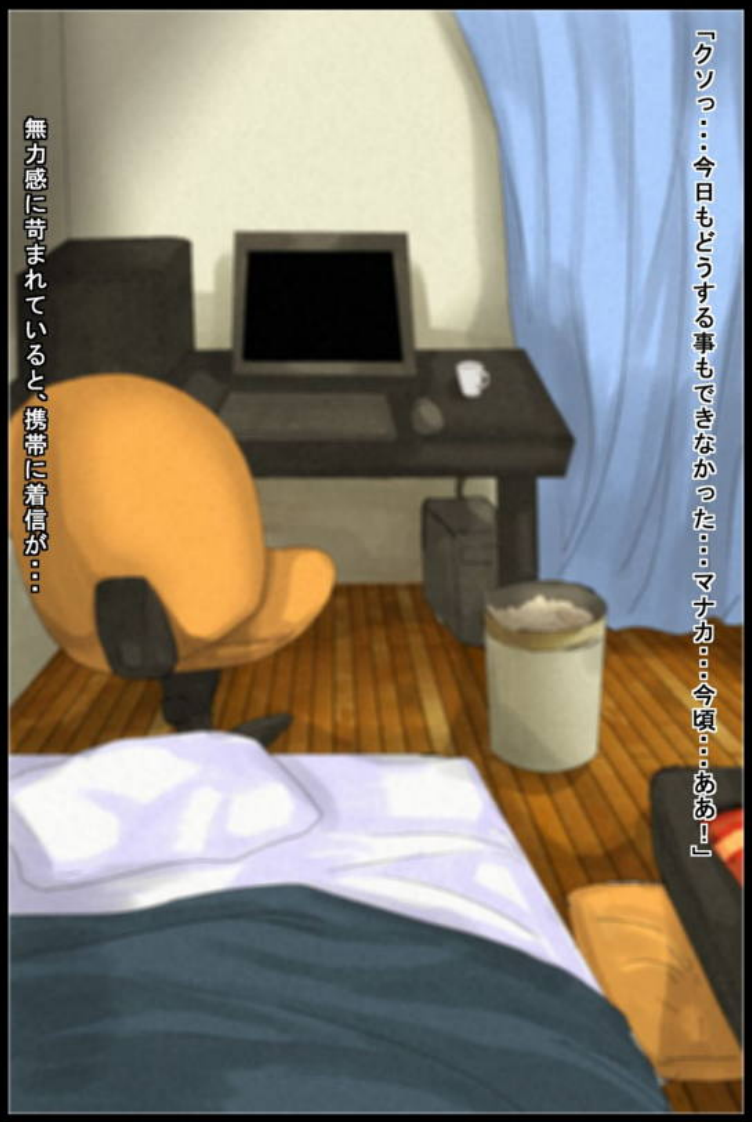
『ありがとう。でもダメ。あなたには言えない事なの』

『そ、そうなの・・・』

『それは、あまり気にしちゃダメ。じゃあ、わたしそろそろ帰らないといけないから。』

『ちょ、ちょっと待って、もう少しいいじゃん、ね』

『ん～、じゃあ帰りながら話しましょ、ね』



「クソっ・・・今日もどうする事もできなかった・・・マナカ・・・今頃・・・ああ！」

無力感に苛まれていると、携帯に着信が・・・

「もしもし・・・あ～○○君、俺だよ俺。もしも～し、君の彼女にチ○ポ突っ込んで
こねくり回してアンアン言わせている俺ですよ～。
まあ、しゃべりたくないならきいてるだけでいいよ。
あのさぁ、キミ、マナカの事取り戻したいんじゃないの？
がんばってるの？もしかして諦めちゃってる？
いいのかな～、マナカほどの女はめったにいないよぉ。
そこら辺に転がっている女どもとは「格」が違う。
俺だったら絶対諦めないけどな～。

・・・よし！キミに気合の入る画像や声をコレからは
お届けすることにする。」

しばらくするとメールが届いた。無論、奴からだ・・・

画像が添付されている・・・

そこにはほぼ全裸のマナカが写っていた・・・。予想していた事だが、やはり実際に映像を目にすると「ドクン」と心臓が悪い意味で高鳴るのがわかる。やはり実際に

すると、また奴から着信だ

『ふふ、どう？キレイに撮れてるでしょ。』

『もぉ～顔は撮らないでっていったのにぃ～。ねぇ～誰とはなしてるのぉ』

かすかにマナカの声が聞こえる

「それ、たった今撮った写真だよ。ふふ、パソコンの方にも送ってあるから、大きな画面で見たかったらそっちを見るといい。ああ、マナカ、ちょっとコッチ来て。コイツにさぁ、今からなにするかおしえてやってよ。」

『え～・・・、イヤ・・・誰なの・・・恥ずかしいよ・・・』

「あ！俺のお願い聞いてくれないなら今日もお預けだぞ。明日もお預けにするぞぉ」

『わ、わかった、わかったからぁ・・・』

「いまからマナカにかわるから、キミは声をだすなよ。ふふ実況だ。」

『もしもし・・・わ、わたしは今から××さんと・・・その・・』

「大丈夫だ、マナカ、その電話のやつは俺の親友で絶対誰にも言ったりしない。」

『せ、セックスします・・・き、昨日はいじわるされて・・・してくれませんでした・・・だ、だから今日はしたくてしたくて・・・あっ・・・今、舐められました・・・お、オ○ンコを舐められまし・・・あっ・・・た。』

『んっ・・・んぁ・・・あっ・・・・』

『んっ・・・!あっ・・はぁはぁっ・・・あっああっ・・は、はいってる・・・お、おチン○ン・・きたぁ・・あっ・・はぁはぁ・・・い、今・・全部・・・はいってます・・・あぁ～～・・・はぁ・・あっ・・・』

『はい!ココまで～。ふふ、おぁ・・・、ああゴメン、マナカのオ○ンコがあんまり気持ちよくてねぇ。ふふ、舐めまわしたいしキスもしたいんでもう電話切るよ。じゃね。』

しばらくの間、放心していた・・・そして、僕はパソコンを立ち上げ、そのモニターでずっと先ほどの写真を見つめていた・・・

こうしている間も あの二人は汗だくになって抱き合い、唾液を交換しあい、性器を結合させてひとつになっている・・・さっきの彼女の声が耳に残っている・・・僕ではなく奴が出させている、彼女の甘い声が・・・

セックスする直前の、ヤル気満々の画像を見ながら、そんな事を思っていた・・・

そんな時、またしてもメールが。

[件名]一発目が終わりました

さっきは急に電話を切ってすまなかったね。
画像は一発目を出して(約束どうり外に出してます)
マナカにお掃除させているところです。
残った精液を吸い取って、自分のオ○ンコ汁を
舐めとっても、上目使いで俺を見つめながら
吸い付いて離れません…。
どうやらまだ足りないみたいです。
(いつも一回では満足してくれません(;´▽`A``))
このメールをキミが読んでいるときは二回目を
していると思います。

それじゃ、またメールします。

制服が衣替えをして、数日がたった、そんなある日・・・。

『オッス、マナカだよ。』

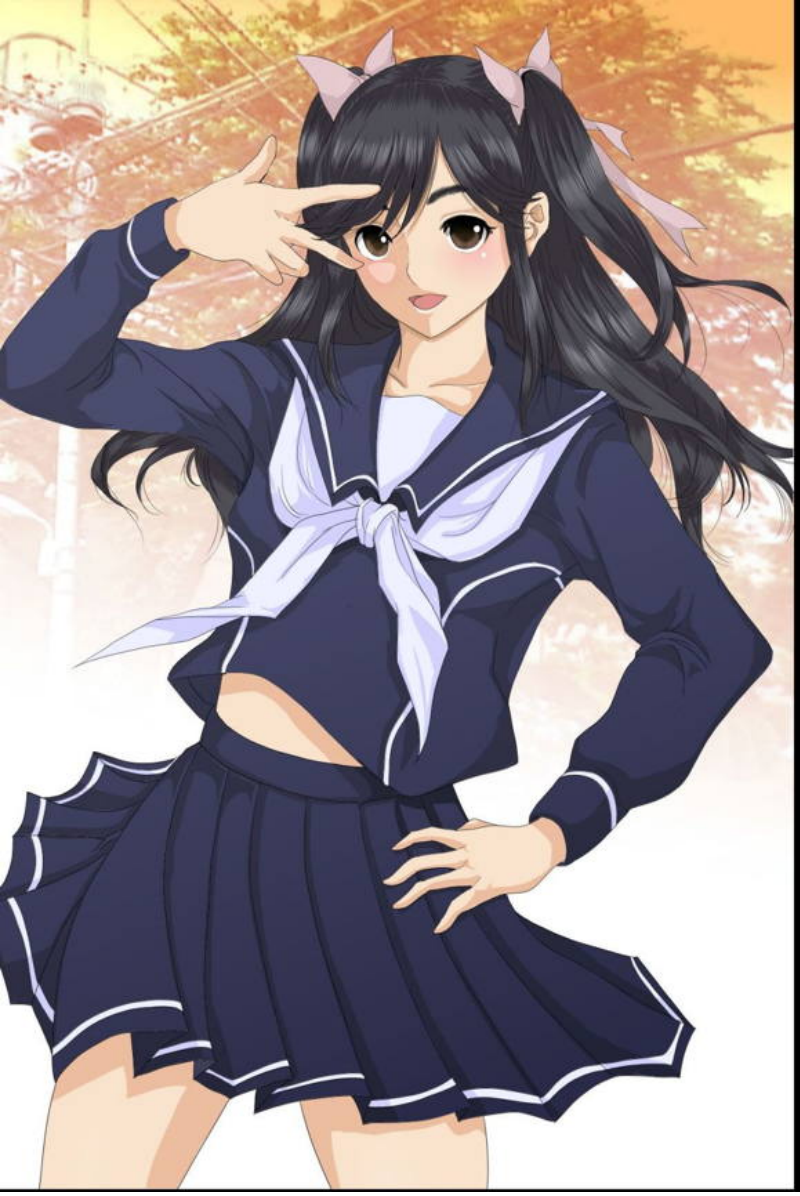
『あ、おはよう、マナカ』

彼女は最近、髪型をよく変えるようになった。アイツの命令か趣味なのか？
変えるたびに感想を聞いてくるし、褒めると「気に入ってもらえてよかった」的な
事を言って喜ぶが、ホントに僕のためなのか？なんて思ってしまうのは、もう僕が
壊れかけているからなんだろうか・・・。

でも、ひとり部屋でモンモンとしているときは「もうダメだ、耐えられない、忘れよう・・・
もうアイツからは取り戻せない・・・などと完全な欝思考になるが、こうして笑顔で
話しかけてくれる彼女をみていると、
さらに風が運んでくる彼女の髪の香りを嗅いじゃったりすると
もう好きで好きでどうしようもない！そんな煮えたぎるような気持ちでいっぱいになる。
だから、まだ大丈夫だ、僕は壊れてなんかいない、僕は諦めが悪いんだ、催眠だか
マインドコントロールだか何だか知らないが、クソ汚え方法でしか女をモノにできねぇゴミ
中年にこのままいいようにさせねぇ・・そんな考えで頭がいっぱいになる。

『どうしたの、朝から難しい顔しちゃって、ふふ、今日はあなたの誕生日だね。おめでとう、
あのね、プレゼントはちょっと待ってね、ちゃぁ～んと用意してあるから、楽しみにしててね。』

『そうだった・・・今日は僕の誕生日だった・・・マナカのことばっか考えててそんなモン
すっかり忘れてた・・。』



――放課後

『はい、お誕生日おめでとうぅ。気に入ってもらえると嬉しいかな、なんて』

『あ、ありがとう。な、なんだろな。』

『あ、家に帰ってから、開けて。そのほうがいいっていって言・・・良いから』

『えっ？う、うん。とにかくありがとう、嬉しいよ。』

プレゼントに包装を開けるとしっかりと閉じられたビニール袋の中に・・・
パンティーストッキングが入っていた・・・。
添えられている手紙を読む
『お誕生日おめでとう。ちょっと変わった贈り物で驚いているかな?なんて。
じつはある人から、ホントはあなたはこういうモノが欲しい
けど、恥ずかしくて言えないから、わたしからプレゼントされたら、きっと物凄い
よろこぶよ、と教えてもらいました。
わたしの匂いが強く染み付いていればいるほど良いという事なので、3日間も
同じストッキングを履いていました。
まだそんなに寒い季節じゃないので股間やつま先などが蒸れ蒸れでした。
喜んでもらえると嬉しいです』

僕がパンストタイツフェチだってことも奴には知られているのか・・・くそっ・・・
くそっ!くそっ!くそっ!くそっ!
くやしい!・・・くやしいが・・・このプレゼントは・・・うれしい・・・・くそぉ・・・・
袋からそっと取り出す。まだほんのりとつま先部分が湿っている・・・そっと鼻を近づけて
すぅ〜・・っと匂いをかいで見る。
鼻の奥をコツンと叩かれたような強烈なマナカの匂い・・・。
「くさい」と分類してもいいであろうその匂いを僕は何度も何度も嗅ぎ続けた
止まらなかった・・・
嗅ぎながら右手を動かしチ○ポをしごき続けた・・・、
惨めさに泣けてくる、しかしやめられなかった。
マナカの匂いに激しく興奮していた。

ー　ちょうどその頃、マナカの部屋で二人は裸でキスをしながら話をしていた　ー

『んっ・・んっ・・はぁ・・・ねぇ・・・ホントに彼、あんなプレゼントで喜んでくれてるのかなぁ、何日も履いたパンストなんて汚くて・・・そのぉ・・臭いだけだと思うけど・・・』

『ん？んふふ、わかってないなぁマナカは。大丈夫、絶対喜んでるよ。今ごろ一心不乱に匂いをかいでオナニーしてるよ。』

『ええっ～、してないよぉ、きっと。』

『してるさぁ、だって彼は俺みたいにこうやってお前と、んっ・・・はぁ・・裸で抱き合ってキスできないし、体中をなめまわすことだってできないし、お前のオ○ンコの匂いも味も知らないんだから。』

『そうなのかなぁ・・でもわたしの匂いだけでそんなに興奮してもらえるなんて、ちょっと嬉しいかも』

『それだけ彼がお前のことを好きな証拠さ。どうでもいい女の臭いパンストなんて吐き気がするだけさ。それよりマナカ、んっ・・・こんなに・・ん、エッチなキスをされたら俺また勃っちゃうよ。』

『ん、んはぁ・・・ふふ、そしたらまたわたしのオ○ンコでつつんであげるっ、んっ・・・・』

僕がマナカのパンストの匂いでオナニーしていた時・・・こんな会話がなされていた・・・

『ふふっ、おチン○ン硬くなっちゃったね。じゃあ約束どうりオ○ンコできゅくっと包んであげるっ』

マナカは××の上に跨り自らの手でパックリとオ○ンコを拡げゆっくりと腰を落としていく

亀頭がマナカの膣口をゆっくりと拡げ、二人が結合していく。

『んっ・・はぁ・・あ・・先っぽきたぁ・・』

根元まで完全にチ○ポを飲み込んだマナカは、じっくりと味わうように、ゆっくりと腰をグラインドさせている。

『あくあぁ、彼氏の誕生日なのに、また俺とひとつになっちゃったよ。いいのかなぁ』

『あぁん・・・いま○○わぁ○○○彼の事は言わないでぇ○○○あっ』

「ははは！俺とセックスしてるときは彼の事はどうでもいいか？」
「あんっ・・あっ・・い、今は・・わたし・・・わぁ・・・あなたのモノだからぁ・・・
あなただけの・・・モノだからぁ・・・
んあっ・・・あ、あなた・・だけ感じて・・あっ・・・いたいからぁ・・・・」
「はは、セックスしてるときはオ○ンコに入れてる男だけが大事かぁ～、
お前みたいな、いいコが彼女なんて彼氏は幸せ者だな、ははは！
まったく、うらやましいよ（笑）」
「あっ・・すごぃ・・・
ああっ、んっ、んっ
きもちっぃ、あっ
きもちぃ、あっ、
お、オ○ンコ
はっ・・はぁっ
きもちぃぃぃのぉ！
はっ、あっ、あっあっ」
パンパン
ぐちゅぐちゅ
どくん
どくっ
パンパン

「なあ、マナカ。今日はオ○ンコのナカに出してもいいか？」
「え！？だ、・・・だめぇ・・んぁ・・・だ、だって赤ちゃん・・できちゃう・・・」
「ふふ、知ってるよ。ふたりのコドモつくるのそんなにイヤ？」
「んぁ、あっ・・・い、いやじゃ、ないけど・・・こ、困る・・・」
「ほら、オ○ンコはこんなに俺の精子ほしがってっるよっ！」
「んふぁあ！んぁああ！あっ、ああっ・・・んっ」
「・・・マナカ、排卵日だからって１００％
妊娠するわけじゃないから、なっ」
「や、あっ・・・やぁ・・・だめぇ・・・おねがぃ・・・ねっ・・」
ズッ
ズッ
ズッ

「このオ○ンコは俺のモノなんだろ。」
マナカの感じる部分を集中的に刺激を与える、激しい快感に彼女は仰け反る。全身が汗で濡れ、二人の結合部分は愛液でぺちょぺちょになり、出し入れされるたびにぶしゅぶしょと卑猥な音を立てる。
快感を与え続けてくれる男に彼女の心は最後の堤防を決壊させた・・・
「ん！んあっ！！あっ、お・・・はっ、はぁっ・・・・・・
わ、わかったからぁ・・・あっ、い、いいよっ・・・
オ○ンコに出してっ・・・いいよっ・・・」
「俺の精子で妊娠してもいいんだな！」
「んああっ！するぅぅぅ！妊娠するぅ！！
あなたの赤ちゃん妊娠するっ！」
その絶叫と共にマナカは絶頂した。
「んああっ！あ！あ！も！あ！お、オ○ンコいってる！
もう！オ○ンコぉ・・・イってる！も、ああ！！」
とどめを刺すように激しくオ○ンコを
掻き回し、突きまくる、そしてついに・・・

ついにマナカの胎内に精子が注入されてしまった。
その瞬間、マナカに覆いかぶさり射精の間ずっとキスをし続けた。
マナカも膣内で精液を放出されているのを感じながら舌を絡めていた。
混ざり合う体液、そして二人が溶け合っているような言葉にできない快感を
感じていて、彼氏の事など、今は完全に消え去っていた。
ビクビク
ドクドクッ
ビュッ
ドプッ

今はまだ確証はないが、マナカは確信していた。
『ああ、わたしはこの人の子供を孕んでしまった』と、今日わたしは妊娠してしまったんだ』と。大好きな彼氏の誕生日に、彼以外の男の精液で妊娠してしまった』と。オ〇ンコの一番奥までチ〇ポをねじ込み、唇に吸い付き口内を蹂躙している男を見つめながら、そう思っていた・・・

射精後もしばらく結合していた二人だが、やがてゆっくりとチ〇ポを引き抜く。
ずるり･･･と栓を抜かれた膣口から精液があふれ出す。
確かに膣内射精された証･･･。
ふ～、ふふふ、彼との約束を破ってしまったな、
なんて言い訳しようかなぁ。
ふむ･･･彼にも少しはいい思いをさせてやるかな･･
匂いつきパンストで終わりではあまりに
かわいそうだしな（笑）

僕の誕生日以来、マナカがたびたび部屋に来るようになった・・・が、ココに来たときだけなぜか彼女の性格が『S』というか女王様っぽいというか・・・そんな感じに変更されていた。いつものマナカとはまったく別人のようだが、この間は二人きりでいられるという事、アイツから彼女を遠ざけていられるという事に満足していた・・・。

ドンドンと荒々しくドアをノックされ、急いで開けると彼女が土足のままズンズンと部屋に入ってくる。

『わたしが来たときはもっと早くドアをあけなさい。いいわね。返事は？』

『は、はい・・・』

『ふふふ、そうよ。素直なコは好きよ。ほら、もっとコッチに来なさい。そう、そうよ。リクエスト通りブーツに黒パンストで来てあげたわ、嬉しいでしょう？』

『う、嬉しいです・・・』

『あと、もうひとつリクエストがあったわよね。ふふふ。コートを脱いで欲しい？じゃあ、まずあなたから脱ぎなさい。』

僕は素直にしたがいズボンとパンツを脱いだ。マナカの匂いを感じて、パンストブーツの足を見ていたので、もうすでに勃起していた。

『ふふふ、もうそんなになっちゃってるのぉ。そんなにわたしの事が好きなの？ふふ、カワイイ。それじゃあ見せてあげないわけにはいかないわね。』

『ふふふ、こんな格好を要求するなんてホントに変態よね、あなた。ありがたく思いなさい。変態のあなたはわたしの匂いが染み付いているほうが喜ぶから、今日は朝からずっと身に着けていたのよ、もうオシッコするのも大変だったんだからっ。』

濃紺のレオタードが彼女の体にピッタリと張り付いている、腋にうっすら見える汗染みが僕の興奮を煽る。

『もうオナニーしたいんでしょう、いいわよ。ほらっ、大好きなわたしの体臭でオナニーしなさい。ふふふ、手を出しなさい、そう・・・わたしの唾を上げるわ、オチンO〇にたっぷり塗りなさい。』

手を広げるとそこに彼女がだら～っと唾を垂らす・・・それを自分のチ〇ポに塗りたくった

『ふふふ、ホントはおしゃぶりして欲しいって顔ね。でもだぁめ。わたしの口はあの人専用なの、ゴメンなさいっ、ふふ。』

そうやって言葉で僕を虐げる彼女の表情は、とても楽しそうだ・・・

『さあ、横になりなさい。そう・・・顔に乗ってあげるから。あっ、手で触っちゃダメ。鼻と唇だけ触ることを許してあげる。』

彼女は僕の顔の上に跨り、ぐいっ　と股間を押し付けてきた。今まで触れることを許されなかった彼女の感触が・・・それだけでもうイキそうだった、しかしいつも一発だすと彼女は帰ってしまうため必死でこらえた。

彼女の体温、やわらかくしっとりと湿っている割れ目の感触、ナイロンや汗やいろいろなものが混ざった強烈な体臭・・・最高だった・・・。

そんなとき、彼女の携帯に着信が・・・

『はい・・・うん、うん・・・そう、いま彼の部屋。そう、オ○ンコの匂いでオナニーさせてあげてる・・・うん、ふふ、大丈夫、セックスなんてしてないわ。だって彼、わたしが部屋に来ただけで勃起しちゃってるのよ、わたしとセックスなんてしたら、興奮しすぎて気絶しちゃうわ、ふふふ。』

彼女がアイツと話し始めたが、僕は彼女の体臭をむさぼる事に夢中だった・・・。

『え、うぅん、まだ言ってない・・・えぇ、でも・・・かわいそう・・・うん、そうね・・・わかった・・・じゃあ一回行イカせてあげたら・・・うん。』

電話が切れたとほぼ同じ瞬間に僕は射精した。

『ま、まだ、足りない！お願い、マナカッ！』

『もうっ、敬語じゃなくなってるよ・・・しょうがないなぁ、じゃあ腋の匂い嗅ぎながら開きなさい。』

すこし優しい感じになっている彼女だったが、次に出てきた言葉は衝撃的だった・・・

『わたしね・・・妊娠したの・・・』

『えー？』

『え・・・な、なに・・・いって・・・え？』
僕は頭が真っ白になってしまっていた。口をアホみたいに開けたまま彼女の瞳をみつめる・・・

『だからぁ、わたし姓娠しちゃったの。××さんとの赤ちゃんを孕んじゃいました。』

『は・・はははは・・・は・・・な・・・なんで・・そ、そんな・・・』
僕の中で何かが壊れたような気がした・・・終わった・・・終わったんだ・・・へ、へぁはははは

『なんでって・・・それはね、わたしと××さんは毎日セックスしてるからよ。
彼のオチンOンをわたしのオOンコにズボズボ突っ込んでもらって、何回も何回も
オOンコの中に精液を流し込んでもらったからよ、ふふふ。』

『だから・・・ゴメンなさい・・・あなたとは、もう・・・終わりなの・・・今日はそれを
伝えに来たの。あなたの事が嫌いになったわけじゃないのよ、でもわたしはもう完全に
あの人のモノなの・・・。だから女王様ごっこも、あなたのオナニーのお手伝いも
今日で最後・・・ね。』

『や、やだよ・・・マナカ・・・やだよ・・・』僕は半泣きでうったえた・・・

『ヨシヨシ・・そんな顔しないで・・・』僕の頭を撫でながら言う
『あなたがすぐに納得する分けないってあの人も言ってたわ、じゃあね・・・』

『あの人がね、わたしを調教する様子を記録したいらしいの、固定カメラじゃダメなんだって、誰かカメラマンが必要なの。でもさすがに知らない人にわたしがアンアン言っている所をずっと見られてるのは抵抗があるの・・・。でもあなたならいいかなと思って、なんて。』

どうせ、アイツの企みなんだろ・・・へへへ　いいぜ・・・とことん
つきあってやる・・・はは・・はははは・・へへへ好きな女がドンドン
堕ちていく様を見るのも悪くないなぁぁ・・へへへ

『どうかな？考えておいてね。あっ、引き受けてくれたらサービスしちゃう、なんて。』

そう言うと、彼女はコートを着てそそくさと出て行った・・・。

マナカが出て行ってからしばらくたって、アイツから電話があった。

『話は聞いたようだね、ふむ・・・キミの受けた衝撃は想像に難くないよ。
俺からの提案の事、考えておいてくれ。これは別に強制じゃないよ。
彼女の事はスッパリ忘れるという選択肢もありだと思う。君にかけた制限は
俺とマナカに関わらなければ生きて行くうえでまったく支障がないから安心
してくれ』

すこし冷静さを取り戻し、いろいろ考えてみる・・・
マナカはアイツとセックスしている事を僕に知られたくないんじゃなかったのか？
膣内射精はしないんじゃなかったのか？なんなんだよカメラマンって・・・
もうわけがわからなかったが・・・ひとつだけハッキリしている事がある。
それもはもう僕とマナカはもう終わりだってこと・・・

その翌日からは学校をサボった・・・とにかく何もヤル気がおきなかった。
久しぶりに登校してみると、校門付近で彼女の姿を確認した・・・・が、話しかける事ができなかった・・・。
ポニーテールをふわりと風になびかせ、上品に歩く彼女の後姿からは
とても想像できない。
毎日毎日中年のオッサンと自分の部屋でセックスをして、何度も膣内射精を許し、
その結果、子供を孕んでいるという事など・・・

ナカ出しされて妊娠している・・・今日も帰ったらアイツとセックスする・・・
妊娠してるのに、また中に出す・・・あの男の精子で妊娠・・・・マナカは妊娠している・・
・・・
ぐるぐるぐるぐる一日中そんなことを考えていた・・・そのことしか考えられなかった・・・
もう僕は正気と狂気の狭間にいるんだろう・・・
いつのまにか僕は食虫植物に誘われる虫けらのように、フラフラとした足取りで
彼女の家へと向かっていた・・・。

インターホンを押すと珠深さんが出迎えてくれた。ノーパンにパンティストッキング姿で・・・
びっしり生えているマ○毛がハッキリ見える。そのありえない格好を意に介しない様子だ。
僕の視線が股間に釘付けになっていると
優しい笑顔と声で

『あらぁ　久しぶりね。いらっしゃい。あのコなら部屋にいるわよ。さっ　あがって。』

珠深さんも当然アイツのオモチャにさせられていた、マナカが外出中は
きっとこの人を弄んでいるんだろう・・・。

ノックをして部屋に入ると中は暗く開けたドアの
光がちょうど彼女を浮かび上がらせていた。
「あ、来てくれたの？いらっしゃい・・・んっ・・・。
そこに部屋の電気のスイッチあるから、点けてくれる・・・」

「やあ、ようこそ。ふふふ歓迎するよ。
マナカ、今布団の中がどうなってるか教えてやれよ。」
「えぇ～・・・あっ・・ん・・・あ、あのね・・・い、いまぁ
べちょべちょのオ○ンコのにぃ・・・オチン○ンがずっぽり
挿入されてます・・・。
あっ・・・ゆっ・・・くり、はぁ・・・ぬかれてっ・・・
あっ、ま、またゆっくり・・・はいって・・・んっ！」
「○○君、俺たちが裸でいるのにキミだけ服を着てるなんて
ずるいぞ。そのGパンとパンツは脱いだらどうだ？」
僕は命令どうりに脱ぐ。悔しさ、やるせなさでいっぱいだが
同じくらいの興奮を抑えられない。
「ふふ、ほらマナカ見てごらん、もうガチガチだよ・・・
俺たちがつながってるとこもっとよく見せてあげよっか。」

布団をはだけると二人の結合している姿があらわになる。マナカのオ○ンコは奴のペニスを根元まで飲み込んでおり、ニチュニチュと音を立てている。グイっと両腕をもたれ上半身を持ち上げられた体勢になると、表情が快感に酔いしれて、熱い吐息をもらした・・・。

突然アイツが激しく突きはじめる。
ズパンズパンとその音が響き、彼女の体はガクンガクンと
揺れ、尻肉がブルブル波打っている。
ズパーズパー
ガクンッ
あ♡
イッ
お、
はぁぁ♡
スゴッ…♡
あぁ♡
アッ！
あ♡
あ♡
ブルッ

こちらに向き、彼女を下から突き上げる。
さっきより結合部分がよく見える。

『あっ…お　奥まで…届いてるっ…はぁ　あっ
このおチン○ンで　妊娠…したんだよ…んはぁ…
こ、これから妊娠マ○コに射精してもらうからぁ…よく　見ててね、なんて…』

何度も何度も激しくオ○ンコを突きまくる
マナカの息遣いもどんどん荒くなる

『あっ！あっあっあっ・・・ん！イ、イク　イクイク！オ○ンコいっちゃう！』

ビクビクと体を痙攣させマナカは絶頂する、そしてヤツは当たり前のように膣内で射精する

マナカの胎内に精液を全て吐き出したチ○ポをゆっくりと引き抜くと
どろりと精液がオ○ンコから出てくるのが見えた。

『○○君、せっかく来てくれたのに悪いんだが、まだカメラが用意できていないんだよ。
そんだから今日のところは帰っていいよ、じゃあね。』

帰り道・・僕はフラフラとした足取りで歩いていた・・・。
激しいブレーキ音とクラクションの音・・・
ヘッドライトの光を確認した直後、
ドンと全身に衝撃を感じた・・・

僕が目覚めたときは病院のベッドの上だった。医者の説明によると、体のほうはそれほど重大な怪我はなかったが、意識が戻らなかったらしい。
驚いた事に事故にあった日から、かなり長い時が経っているらしい。
リハビリのあと僕は退院した・・・・。

マナカはどうなってしまったんだろう・・・

久しぶりに戻った自分の部屋でパソコンを立ち上げてみると「アイツ」からのメールがたくさん入っていた。
「キミがあんな事になって驚きました、入院している間の彼女の様子を記録しておきます
〔よく考えたら彼女の親に撮ってもらえばよかったと気づきました〕」的な事が書かれていた、
さらに、アップローダーのリンクとダウンロードパスが書かれていた。
僕はそれらのいくつかをダウンロードして、日付の古い順から再生していった・・・。

動画ファイルネーム＼母親の催眠を解いてみる。

お・・・お願い・・・もうやめてください！どうしてこんな・・・。

「む、娘には手を出さないで！娘にだけは。おねがい！」

バイブレーションON

『んぉあ…ああ！あっあっ……だ、だめぇ…』

『奥さん、安心してください。娘のマナカさんに酷い事などしませんよ。今もあなたの目の前にいますよ。ほら、お母さんが心配してるから、大丈夫だって言ってあげな。』

「…うん、大丈夫だよ。酷い事なんてされてないよ。××さんはとっても優しいし素敵な人だよ。」

『ほ…本当に大丈夫なの！』

「大丈夫ですよ。ただ生でセックスしているだけですから。ふふふ」
「！！！！そ、そんな！やめて！」
「あなたも旦那さんとさんざんしたでしょ？それにこのコも俺のチ〇ポがお気に入りのようですよ。」
「う‥嘘よ‥‥、やめてぇ‥お願い‥‥その子はまだ‥‥」
「んぉ‥あぁ、聞こえますか、この音。このコのオ〇ンコが俺のをバックリくわえ込んで、もう
グチョグチョになってますよ‥おぉ‥‥」
ぶちゅ
ズッズッ
ぬちゅぬちゅ
はぁ
あ♡
あ
ん♡
ん♡
ん

「あぁ～お母さん、大変です。精子が出そうですよっ！避妊具を着けてないチ〇ポから
マナカちゃんのオ〇ンコの中に精子出ちゃいそうです！」
「お願い！！やめて！！おねがいよぉぉぉ！！それ以上この子を汚さないでぇぇぇ！！」
「んぉお！だめだ！このコのオ〇ンコがこんなに気持ちいいから悪いんですよ。」
ビュル！ドピュ・・・ブブ・・ビュル
『あぁぁ・・出てる・・・せーし出てるぅ・・・はっ　はあっ・・・
オチ〇チンビクビクしてるぅ・・・』
「ああ・・・あ、酷い・・ああぁ・・・マナカ・・・」
ビク
ピク
あぁ
あん
ビュル
ドク
ドクッ
びゅる
ビク
ビク

「このままもう一発、膣内に射精しますね～。おっとその前にバイブのレベルをMAXにしましょうか。」
体勢を変え、再びチ〇ポをマナカのオ〇ンコに突き刺す。
「はぁ･･･ぁ･･ああ、チ〇ポぉ･･･また、きたぁ･･･」
「ああ･･･ホントに妊娠しちゃう･･･お願いよぉ･･･やめてぇ･･･」
ぬぢゅっ
ずぷぷっ

ずっちゅ
ずっちゅっ
パチュ
ずっちゅ
ずっちゅん!!
ずっちゅ
あ♥
あ♥
んあ♥

マナカは絶頂し、××の精液を再びその膣内で受け止める。
二回目とは思えないほどの精液を全て膣内に放出する。
ビュクッ ドクッ ビュルル
ビュ
ビュ
ビュ
あぁ
あぁ
イグッ
イグッ

「ありゃりゃ…スゴイ顔だな(笑)。」

「あ…う…う…マ…ナカ…あ…やめ…て…あの子…には」

「お母さん、安心してくださ～い。大事な娘さんはもうとっくに妊娠してますよぉ、ははははは。もちろん俺のチ○ポ汁で孕ませましたよ。その若さで初孫なんて、感謝してくださいねぇ、ははははは。」

「…う…あ…うう…ひ…人で…なし…う…。」

激しい快感と精神的ショックで彼女は気絶してしまった

ファイルネーム／　〇〇君へのメッセージ　アフレコバージョン

〇〇君、××さんのチ〇ポ汁で孕まされた、わたしのお腹、だいぶ膨らんできました・・・・。

オチ〇チンのお掃除もだいぶ上手になりました。
このチ〇ポの味と匂いはもう完全に覚えているので目隠しをしててもわかります。

喉の奥までおチ〇チンをねじ込まれいます。えずいてもおかまいなしに射精されます。
ビクビクがおさまった後は、尿道に精液が残らないように一生懸命ちゅ～ちゅ～と吸い取ります。

ケツ穴のほうも開発中です。
むぐ、ん、
んっ

ふーっ♡
ん
ふーっ♡
ん
ぎるるるるっ
ぬぽっ
ぐぱぁっ
ぶぴっ
びくんっ
びくんっ
いっきに引き抜かれて肛門がめくれるかと思いました。

こんな体でも毎日セックスはしています。この映像はオ○ンコしながら
リビングを散歩しているところです。
ああ・・わたし、すごい
オ○ンコがいきそうな時はこんな顔してるんですね・・。
恥ずかしい・・・。
パンッ パンッ
パンッ!!
ヌチュ
グチュン

背中には『精液専用肉便器』と書かれていたんですね。ヒドイです、ふふふ。実際にはオシッコも飲んだりケツ穴に流し込まれてたりするので、精液専用じゃないですよね、なんて。
ああ、社畜マ○コに容赦なく射精されてますね。この体の中を汚されている感覚がたまりません。
精液専用肉便器
でてる
ん♡
あ♡
ドクッ
ドクッ
ビュ
ビュッ!!
ドブッ

妊娠してから9ヶ月ほど経過した
厚手のタイツとワンサイズ小さいレオタード着用を強制され、乳房と肥大化した腹はギュウギュウと締め付けられている。長時間着用しているため、腋や股間などが汗などにより染みが付いている。
股間は切れ込みが入っていてレオタードを着たままセックスできるようになっている。
服従のポーズで××のチ○ポを凝視して、挿入を今か今かと待ち望んでいる。

マナカは自分を孕ませた男を
愛しそうな目で見つめている

この男の唾液、小便、精液などあらゆる
体液を彼女の体内に吐き出されることを
至上の喜びと思わされている・・・。

事実、彼女の体は外側も内側もこの男の
吐き出す体液で完全に穢れていた。

自分の事を愛してなどいなく単なる
肉便器と思っているという事など
想像もしていない・・・。

お、んお、おお…
ん、んお、イグ、イキて、お…
この体勢だと彼女の腹は垂れ下がり
突かれるたびにプルプルと揺れ動く。
××は彼女の体を気づかう様子はいっさい無い。

マナカはその顔を歪めて絶頂する。全身をガクガク揺らし、大声を上げる。
そして××はギュウギュウ締め付けるオ○ンコのナカに精液を放出する。
イグ！イグゥゥゥ
ア！アッ！アアッ！イグイグ！
ビクンッ
ビクビクッ
ガクガクッ
びゅるっ！びゅるっ！
ドクドクッ

両足をガッチリとホールドされ、カメラ側に向けられた彼女の股間は、
もうホントにグチョグチョになっており、さきほど膣内に射精された
精液がドロリと滴り落ちていた・・・。
はぁ～～
はぁ・・・
『マナカ、そろそろ俺以外のチ○ポも味あわせてやるよ。』
『はぁ　はぁ・・・え？・・・どういう・・・こと・・・』
『専用肉便器から公衆肉便器にランクダウンって事だよ、ふふふ。楽しみにしてろ』
『そ・・・そんな・・・』

この動画よりも新しい日付の動画はアップロードされていないみたいだ。

彼女の悲惨な様子を見て、僕は・・・・・・逃げ出した・・・・。

この町から逃げ出した・・・学校を辞め、実家に戻りニート生活を始めた。

彼女を見捨てて逃げ出してしまった・・・そんな罪の意識に苛まれ、
しばらくは何もする気にならなかった。
ボーっとする毎日を過ごしていたが、やはり頭のどこかで彼女がいま
どうなっているのかは気になっていた・・・・。

あのアップローダーに再びアクセスしてみると、新しい画像や動画ファイルが
多数追加されていた。

しかし

僕はもう見ることはないだろう・・・
僕の悪夢はもう終わりだ。

〚 服従ダイアリー 〛

END

。
。
。

次のページからは「僕」がアクセスしなかったファイルの中身を公開します。
御覧になりたい方はこのままお進みください。

あれからマナカは公衆肉便器の扱いを受けるようになった。
毎日大勢の男達の容赦ない欲望を口でケツ穴でそして妊娠している
オ○ンコで受けなければならなかった。
乳首には奴隷の証としてピアスを取り付けられ、
薬を使用され、腕には注射器の痕が残っている。

「へへへ、今日もみんなで気絶するまで使ってやるからな。」
そう言いながら、縛でトロトロになっているオ○ンコに、チ○ポをねじ込む。
ん、おぉ
あっ
ビク…
ビクッ
ずぷぷぷぷ

拘束具で固定され、ケツ穴とオ○ンコに数え切れないほど
ザーメンを注入されても、ゆるされることなく、次から次へと
男達はその欲望を彼女の体内に吐き出す。
オ○ンコは赤く腫れ上がったようになり、肛門は捲れてしまっている。

限界をうったえる彼女に、非情にも最も絶倫で
もっとも巨大なチ○ポを持つ男が、とどめを
さすかのようにソレを突き入れる・・・。
ずぶっぶぶ…
ぐぐ。

それは性行為というより、破壊といった感じだった・・・。

そしてその巨躯でマナカを押しつぶし、全てを彼女の胎内に注入する。その様子は、今彼女が生きているのか不安になるほどだ・・・。

ほぼ気絶しかけている彼女の
腹や顔の上に、他の男達がザーメンをぶっ掛ける
もはや彼女はほとんど反応しなかった…
「あ…うぅ…」
とうめき声を漏らすだけだった…。